

氏名(本籍)	菅野禮行(福島県)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第461号
学位授与年月日	昭和63年7月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	平安初期の漢詩における中国文学の影響
主査	筑波大学教授 文学博士 内山知也
副査	筑波大学教授 文学博士 伊藤博
副査	筑波大学教授 森野宗明
副査	筑波大学教授 桑原博史

論 文 の 要 旨

本論文は概略次のような構成から成っている(節以下の段は省略した)

序論

本論

第1編 漢詩の形式上の諸問題に関する研究

第1章 対偶表現に関する研究

第1節 対語の諸相における史的展開

第2節 佳句麗章の集の成立に関する文学的意識の発生

第2章 詩形に関する研究

第1節 古体詩の系譜

第2節 近代詩形の対聯に現れた表現上の特質—菅原道真の「不出門」の詩における比較文学的考察—

第2編 漢詩の内容上の諸問題に関する研究—詩語を中心として—

第1章 嵯峨帝の詩における文学的特質の研究

第1節 嵯峨帝の詩における中国文学の受容—『懷風藻』との比較—

第2節 嵯峨帝の詩における模倣と独創

第3節 嵯峨帝の詩における用語上の特質—「清猿」について—

第2章 菅原道真の詩における文学的特質の研究

第1節 道真の詩における和習的特色

第2節 道真の詩における日本文芸的要素

第3節 道真の文学と白居易の文学

以上の構成は第1編を総論とし、第2編を各論とするものである。

〔結 論〕

著者は序論において本論文の目的・方法・意義・時代区分・平安初期を選定した理由・論文の構成と趣旨について自らの立脚点を述べる。要するに本論文は、圧倒的な中国文学の影響を受けた平安初期の日本漢詩及び詩人の実情について考察するものであるが、単に出典論や表層的比較論に止まらず、詩の形式や内容或いは美意識形成に及ぼした影響まで論じようとする。同時に文学史的視点から、この時代を模倣期より日本的美意識の確立に至る過渡期として捉え、嵯峨帝や菅原道真を代表とする詩人の作品を通じて、これらの問題に取り組むものである。著者はこの時代区分を勅撰三集の成立(814)ころから『千載佳句』成立(925~9)ころまでと規定する。この時期、多数の漢詩文集が成立して日本漢文学史上最初の絶頂期を迎えたこと、嵯峨帝の詩や『凌雲集』序には日本の文学意識が芽生え、菅原道真の詩には「もののあはれ」的美意識が発生していることをもって、この時期を選定した重要根拠とする。

本論は第1編と第2編とに大別される。第1編「漢詩の形式上の諸問題に関する研究」は二章に分れる。第1章「対偶表現に関する研究」では、『懐風藻』以来、日本漢詩壇において、対句が格別重視されたことが認められる点に注目し、述語的詩語や的名対をその例として対句技法を考察した結果、『懐風藻』時代に多用された詩語の中にはこの時期に既に用いられなくなったものがあることから、日本側による六朝的詩風からの離脱、唐風摂取への意図が見られるとする。また平安中期より多く出現する佳句麗章の集は『千載佳句』にその端緒を見ることができ、対句重視の理由は、対句を詩の一形式と認める意識から起ったもので、漢文訓読の風習によってもたらされた日本独自の現象であると説く。第2章「詩形に関する研究」では、当時公的な場においては近体詩が作られ、私的な場においては古体詩が作られたが、後者には感傷的内容の作品が多かったことをまず述べる。次に近体詩形の対聯に現われる表現上の特質として、菅原道真の「不出門」の詩の対偶表現に着目し、「都府楼纔看瓦色、観音寺只聴鐘声」の表現は白居易の「遺愛寺鐘欵枕聴、香爐峰雪撥簾看」の対句に基くと従来言われて来たが、同じく白居易の「春江」の詩の「閉門只聴朝暮鼓、上樓空望往来船」にも拠っていると。またその頸聯「中懐好逐孤雲去、外物相逢満月迎」は白居易の「不出門」の詩をふまえてはいるが、白居易がその詩にこめた悠悠自適の境地とは程遠い感傷の気分を歌うものであると説いている。

第2編は二つの章に大別される。第1章「嵯峨帝の詩における文学的特質の研究」においては、まず「人事少」という詩句の意味が『懐風藻』では神仙的世界を表現するのに対し、嵯峨帝時代には清閑の地の意境を表すものに変化していることを指摘する。また帝の「折揚柳」詩は梁の簡文帝の同題の楽府詩の影響を受けつつも、「花寒」という独創的表現の詩語に新しい感覚をもたらしていると説く。さらに「清猿」という詩語は、帝が実景を見据えての猿声の表現であると論じている。

次の第2章「菅原道真の詩における文学的特色の研究」は本論文全体の三分の二の分量を占める

いわば中心的部分に相当しており、道真を通じてこの時期の中国文学受容の特色を明らかにしようとするものである。その第1節「道真の詩における和習の特色」において、著者はまず「九日後朝」の詩をとりあげ、この宴は九月十日宮中において帝が近臣を集めて催す内々の宴で、日本の宮廷にだけ見られる行事であること、道真は「後朝」という詩語を用いた最初の詩人であったことを述べる。次に「就暖」という詩語について、これは中国では暖い所に身を置くという意味であるが、道真はこれを暖かくなったという意味に用いている。これは嵯峨帝の用例に基くもので、詩壇における帝の遺風をしのんで意識的に用いたのものであると説く。第2節「道真の詩における日本文芸の要素」は平安時代の日本の美意識を代表する「もののあはれ」的文芸要素が平安初期の道真の詩に見出され、それはさらに遡上すれば白居易に至ることを論証したものである。著者は道真の詩の「可憐」という詩語をとりあげ、この語は陰影を帯びた奥深さの中に漂うしみじみとした美的情趣を表現しており、その源泉とも言うべき用例が白居易の詩の中にあることを指摘している。また「詩人」という語を道真は自称として用いるが白居易には少ない。自然の変化をいち早く感知し、その感動を巧みに表現することが詩人の使命であるという道真の認識は、白居易から影響されていると説いている。また貞観12年、道真26歳のころの楽府形式による「待月」を主題とする作品群には、五更転形式の作品もあり、不如意な心情の詠嘆的表現を行なっているところは稀有な現象であるとし、そこに用いられる反復的表現を作品の詩題の用例と対照すると、特に感傷的作品に多く現れるものであって、独特のしみじみとした「もののあはれ」に似た情趣がかもし出されているとする。第3節「道真の文学と白居易の文学」では、道真における白居易の強い影響を認める金子彦二郎氏の説や、六朝詩の遺響の存在を確認すると同時に古代を収束し中世の先鋒を為すとする小西甚一氏の説をふまえ、道真の詩の本質から白居易の影響の実情について考察する。まず道真の「落花」の詩は、落花の風情をただ詠物詩的に歌う嵯峨帝や小野岑守と異なり、かつ初唐までの詩風とも異なっている。そこには人間が自然より優位に立つという感情が現れており、それは白居易の影響を受けた結果であると論証している。次に道真に多い「残菊」を主題とする詩について、その著しい特徴は他の詩人が題材とはしない凋残の菊花を詠じている点で、41歳以後の作品に見られること、そしてそれは「残菊」に托して孤高な自己の生き方を象徴したものであるとする。また「自詠」「不出門」と題する詩はそれぞれ白居易の詩題と意趣を継承しているが、特に道真独自の感傷的傾向を強く表わしていること、「離家」という詩句には家郷を離れる感傷だけでなく屈原に自らを擬する所があることを主張している。その次に白居易の雪月花の表現を介して道真の美意識と白居易の美意識の相異を述べる。白居易は57歳の頃雪月花を一括して詩題としたが、そこでは有限な人事とは対照的な仏教思想を背景とした無限悠久な自然美の象徴として用いられ、一種の無常感を漂わせている。これに対して道真の詩には雪月花を一括表現した詩が見られない。これは道真が対象を象徴的に表現することをあまり得意としていないことを示すものだとする。「春尽」（三月晦日）を題材とする詩に関しては、白居易は他の詩人に見られないほど多くこの詩題を用いて季節の推移の悲哀感を歌っているが、それはそのまま道真の詩に反映し、自然風物への愛着とその季節ごとの微妙な推移の繊細な描写となっている。しかし道真の場合は必ずしも三月晦日当日が主題とはならず、別に自らの不遇を

かこつという点が白居易とは大きく異なると述べている。なお「拙」と「慵」という詩語の用法については、白居易はそれらの語を才能や幸運に恵まれない自己への認識の言葉とし、阮籍や嵇康の思想を投影させつつ榮譽聞達を求めない生き方の端的な表現としている。これに反して道真は「慵」はものうとし、「拙」は自謙の詞としてしか用いず、白居易のこの面での思想には影響がないとする。以上の諸点を要約すれば、道真の白居易の詩の受容態度は、詩題・詩語・表現法の撰取に傾き、その思想的本質の部分の受容に関しては主体的意識的に選択していることが明らかである。すなわち道真が受容したものは自然的風物を愛玩する情緒的自然観であって、それは風流を志向する日本の新時代の美意識を確立するために必要な試みであった。また道真は日本の叙情詩の完成を意図し、その理念を白居易の自然観に求め、「もののあはれ」の源泉となる表現を獲た。しかし人間としての生きざまに関わる事、社会政治に対する批判諷刺、不遇のさいの悠々自適の精神などは受容しなかったと説いている。

審 査 の 要 旨

著者は多年にわたり中国文学研究者の立場から中国文学と平安初期の詩人たち、特に白居易と菅原道真の詩の比較文学的研究に従事し、学界に多くの論文を発表している。本論文はそれらの成果の上に立ち、さらに主題に沿った新しい考察を行い、日中両国の文芸思想史的観点に基き、多面的かつ詳細精密な論述を展開したものであって、よく平安朝初期の文人及びその詩に及ぼした中国文学の影響の様相を明らかにしている。それと同時に当時の文人が文学面において民族的・個性的に模倣から自立に向おうとする道程を実証的に検証している。また先人の多くの学説を越える見解主張が各章に見られ、特に菅原道真の美的情趣に関する研究や、白居易の詩語との比較研究による両者の個性的相違の抉摘と影響関係の考察には、今まで論及されなかった方面でのすぐれた成果が現れており、高く評価することができる。ただ第1編と第2編との関連性をより深める論述が欲しかったし、道真の「もののあはれ」的情趣の探求に際しては日本文化の伝統面からする考察も加えてほしかった。しかしこれによって本論文の評価が低められるものではなく、むしろ将来に期待するものである。

よって、著者は文学博士の学位を受ける資格があるものと認める。